

■■ 屋敷名 ■■

「しも」という家

花祭りの組織を見てゆくと、水や雪のことから、さらに霜という語も大分注意を惹いてくる。しかも霜の語は、「しも」すなわち上に対する下の意にも連絡が考えられる。それから思い出されるのは「しも」という名を持つ屋敷である。「しも」すなわち下屋または下の屋敷という名の家は各所にあるが、これがいずれも旧家で、しかも単純に地理的關係からのみ言ったものではないようである。そうして土地の伝承にも、下屋という屋敷に、特別な意義を感じていたようである。その伝承の一つの現れは、一般に伝えられている警え話に、禰宜屋のある土地には下屋はない、したがって下屋のある村にはまた禰宜屋がないとする説である。もちろん村々の屋敷は昔のままに移動がなかったわけではないから、この説は直ちに村々の実際に当て嵌まるわけもないと信ずるが、不思議に「しもや」または「しも」の名のつく屋敷には、信仰関係すなわち禰宜屋敷とでも言う家が多い。これまた各所について求めたら、なお多くの同名の屋敷があることと思うが、今私の手帳に控えたものがざっと左の六家ある。

- | | | |
|---|-----------------|--------|
| 一 | 豊根村大字三沢字山内 | 林 順平 家 |
| 二 | 坂宇場 | 村松林蔵 家 |
| 三 | 下黒川 | 清 川 家 |
| 四 | 振草村大字古戸〔現、東栄町〕 | 伊藤新助 家 |
| 五 | 平山 | 金田喜一 家 |
| 六 | 本郷町大字三ッ瀬〔現、東栄町〕 | 逸姓駒吉氏宅 |

以上のうち、第一の林順平家は、山内の字「下地」にあり、屋号を「しもや」といい土地の幣取り屋敷として、代々宮太夫または宮太郎を名乗った屋敷である。第二の村松林蔵家は、同所の神楽屋敷として、すでに神楽の条にも言った通りで、同所の街道下に屋敷があり、この地方唯一の旧家で、また「しもや」で通った屋敷である。第三の下黒川清川家は、現今の戸主の名を逸したが、一に「しも」と呼ぶ屋敷で、これまた村の地理から言っても下に当たるが、かならずしも下にあるところから言ったものでなく、屋敷を囲んで他にも屋敷があったのである。

第四の 振草村古戸の伊藤新助氏宅は同所の字下古戸しもふつとにあつて、現在は一「みょうど」で屋敷であるが、旧家であることは言うまでもなく、同所田楽の面のうち「しずめ」を初め「おきな」および「みこ」の面の裏に、

ぬり方き丞元 下村 伊藤又右衛門

元文五年閏七月

とあるのはその先祖に当たるのである。

第五の振草村平山の金田喜一家は、同所の黒倉田楽における四寸の鍵取りすなわち「おきな」を勤める屋敷で、屋号をやはり「しも」と呼んでいる。第六の本郷町三ッ瀬の「しもや」すなわち通称駒吉氏の家は、旧家ではあるが、そうした信仰関係のことは現在では何ら痕跡がわからない。

以上は「しも」という屋敷についてであるが、その他屋敷名としては、「にゅうや」「いち屋敷」を初め「もりや」「あれ」「いたや」「あみだ屋敷」等が信仰関係から言っても注意すべきもののようである。

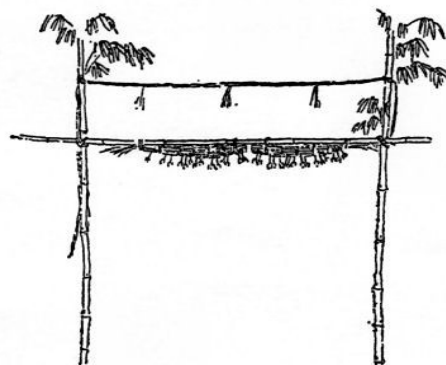
どうど屋敷

屋敷の名から注意を惹くのは「どうど」という名である。振草村字粟代、同古戸字川合にこの名を持つ屋敷がある。「どうど」は一に滝の音からきたとも考えられるが、しかも二者ともに滝の傍らにある屋敷で、前者はその滝から下の淵を「どうど」といい、傍らに架かった橋を今では同道橋という。淵の主を白髯明神といい、村で雨乞いをする時はかならずこの淵の上で行った。しかして蛇婚の伝説があり、その相方の女は、「どうど屋敷」の娘であると言う。一方古戸字川合の屋敷は、現在の住まいはずっと高い位置にあり、名称だけが残っていたわけだが、以前の屋敷は淵の傍らにあった。ある時その淵から大蛇が姿を見せたので、それ以来恐ろしくなって今の地に移り住んだと言う。もちろんこれだけでは「どうど」の名は問題にならぬが、じつは「どうど」の名を持つ神社がある。豊根村大字古真立字曾川には「どうどう天神」という祠があって、明治初年まではその境内で、

五穀祭り、また「しし祭り」と称する一種の狩祭りがあった。また園村大入 おおにゅう は前にも言う通り花山天皇の伝説で有名な土地であるが、花山天皇の伝説は別として、単に村としてもたしかに古いらしいが、ここの氏神は、以前は親方屋敷と言われた花山家の家の神であった。一に十六尊

とおどう
神とも言い、別に遠々大明神とも言って、じつは遠江

かんじょう
の山住を勧請したものである。したがって山住遠々大明神は十六尊神中の一社であった。この山住の遠々明神と、屋敷名の「どうど」の間には、一脈の通ずる



第58図 大入における氏神の注連

ものがあるように考えられる。

ちなみにこの大入と、山の下に当たる遠江の浦川村川合は、ともに花祭りの行われていた地であるが、互いに「おつきあい」祭りと呼称して、双方が祭りのたびに、一方から前日に「ごく」すなわち供物を進ずることがあった。細長い弁当箱のような「ごく箱」があって、これを「ごく番」のものが、携えて来る。そうしてその晩は取持ちを受けて翌日帰るのである。しかし二〇年来このことは絶えているそうである。